

研究ノート

不適切な養育環境を背景とする長期欠席（不登校）児の家庭内における  
情緒的關係に関する一考察

—— ファミリー・マップを用いた事例分析より ——

大 西 良

（長崎国際大学 人間社会学部 社会福祉学科）

The case study of emotional-relationship in the family that has  
become the school refusal by maltreatment

Ryo ONISHI

(Department of Social Work, Faculty of Human and Social Studies,  
Nagasaki International University)

**Abstract**

This study is one of the cases that emotional-relationship in the family of the maltreatment case. The feature of this study is that of using the Family Map.

The results of the analysis, Always seen it is intense negative emotions in the parent-child relationship. And that increase the frequency of and stress in the family becomes stronger behavior problems at school (acting out). And the supporter of intervention in the family showed a change is seen in the relationship.

Based on these results, in this study it was discussed involvement in children's psychological support and family support.

**Key words**

maltreatment, school refusal, emotional-relationship

**要 旨**

本研究の目的は、不適切な養育環境を背景とする長期欠席（不登校）児の家庭内における情緒的な関係について、ファミリー・マップを用いることでその状態と継時的な変化を明らかにすることであった。分析の結果、①親子関係において強く激しいネガティブな感情が常態的にみられること、②家族内でのストレス（葛藤）が強まることに呼応して、学校での問題行動（行動化）の頻度が増すこと、③家庭への支援者の介入によって家族成員間の情緒的關係、特に関係性の「方向」に変化が見られることが示された。

以上のことから、家庭内での葛藤や抑圧された感情が子どもの問題行動として行動化している場合、支援者は子ども本人のみならず家庭全体も支援対象として捉え、日常的な関わりを積み重ねていくことによって、子どもの精神的健康の回復を図っていくことの重要性について論じた。また、虐待的な環境で生きる子どもとかわる際、自尊心の低さや自己肯定感の低下から表出されるネガティブな感情への心理的なケアの必要性についても述べた。

**キーワード**

不適切な養育、長期欠席（不登校）、情緒的關係

## 1. はじめに

厚生労働省の発表によると、2014（平成26）年度に全国の児童相談所が対応した児童虐待相談件数は88,931件（速報値）<sup>注1)</sup>にのぼり、1990（平成2）年度に調査が開始されて以降、一度も減少することなく増加の一途を辿っている。それに加えて、虐待（無理心中含む）による死亡事例も後を絶たず、毎年100名前後の子どもの命が奪われている現実もある。このような実情に対して、児童虐待を如何にして未然に防ぎ、そして早期発見・早期対応の策を講ずるのか、まさに今、社会全体に問われている大きな課題である。

また一方、学校を長期欠席する、いわゆる「不登校」についても社会的な課題である。2014（平成26）年10月に発表された文部科学省の「平成25年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」<sup>注2)</sup>によれば、全国の不登校児童生徒数は、119,617人を数える。特に中学校におけるその数は95,442人にのぼり、割合に換算すると37人に1人という計算になる。つまり、約1クラスに1名が不登校ということになる。ところが、不登校状態から学校復帰できた小・中学生はわずか3割（小学校：32.9%、中学校：29.8%）にとどまっており、ここに不登校問題の根深さと対応の困難さが窺える。さらに、不登校に至った理由（きっかけ）に関しては、友人や教職員との関係をめぐる問題や学業不振などの「学校生活に起因する問題」が36.2%で最も多いが、親子関係をめぐる問題や家庭内の不和などの「家庭生活に起因する問題」も全体の約2割（19.1%）を占めている。特に、「家庭生活に起因する問題」から不登校になっている子どものうち、児童虐待などの不適切な養育環境が主な原因（要因）となっているケースについては、これまでの先行研究において報告されている。例えば、保坂<sup>1)2)</sup>は長期欠席（不登校）の児童生徒の背景に深刻な虐待が存在することを複数の著書や論文で指摘している。また羽間<sup>3)</sup>も、接触困難な長期欠席（不登校）児の中

には、緊急的対応が必要な虐待が疑われる事例も多く含まれていることを報告している。さらに安倍<sup>4)</sup>の研究では、「ネグレクトされている子どもによく見られる状況の集計表」の中で、ネグレクトの重症度を測定する項目の1つとして「不登校（園）」を具体的に挙げている。

このように児童虐待（ネグレクト含む）という不適切な養育環境と不登校との関連性については、幾つかの先行研究によってすでに明らかにされており、さらに文部科学省の『現在長期間学校を休んでいる児童生徒の状況等に関する調査結果とその対応について（通知）』<sup>注3)</sup>では、学校は長期にわたる欠席の背景に児童虐待が潜んでいる場合があるという認識を持ち、当該児童生徒の家庭等における状況の把握に特に努める必要があることを示している。

しかしながら、不適切な養育環境を背景に長期欠席（不登校）に至っている子どもへの具体的な支援の手立てを得ることを目的に、家族成員間の情緒的な関係を検証した研究はまだ数少ない。

そこで本研究では、不適切な養育環境を背景に長期欠席（不登校）を呈する一事例における家庭内の情緒的關係について、ファミリー・マップを用いながら、その状態と継時的な変化を明らかにするとともに、スクールカウンセラー（以下、「SC」とする）や教職員、児童相談所等の関係機関の支援者が介入することで見られた家族成員間の情緒的な関係の変化について考察することを目的とした。

## 2. 方 法

### 1) 分析対象事例

本研究では、不適切な養育環境という、いわゆる「虐待的」要素を含む人間の尊厳にかかわる事柄であり、なお且つ秘密性の高い内容を取り上げるため、倫理的な観点から、事例ではなく架空の事例を作成することにした。

そこで今回、分析対象事例として、不適切な養育環境を背景とする長期欠席（不登校）の一

事例を、SC である著者が学校現場で実際に支援に携わった複数の事例をもとに作成した。なお、本事例の内容は架空ではあるが、重要な事実関係については変えず、支援の展開プロセスや家族成員間の関係性、ならびに関係機関等の支援者の関与については、いくつかの事例に共通する内容を網羅し、ある程度現実感を持って作成した。また事例の作成にあたっては、ジェノグラムやファミリー・マップなどを含むアセスメント記録、支援プロセス記録、登校（出欠日数）に関する記録、日常の健康状態を記した保健記録など、著者がこれまでの臨床経験で蓄積してきたものを参考にした。

## 2) 研究デザイン

本研究では、事例の検証に有効とされる単一事例研究法（single case study）を用いることにした。その理由は、実験群を形成するための同種の対象を設定することが困難であること、また複数の事例の比較ではなく個別の事例で起こる変化に強い関心を寄せているという点からである。

なお、本研究では、介入を行う前の状態を「ベースライン期(A)」とし、また実際に介入を行った段階を「インターベンション期(B)」とする A-B デザインを使用した。

本事例は、長期欠席（不登校）を呈する事例であるため、「登校（出席）日数」を測定指標の 1 つとして定めた。また合わせて、行動化を測定する指標として、子どもが呈する「問題行動の頻度」をもう 1 つの測定指標として加えた。そしてこの両指標について、介入前から介入後までの時間的経過を追って、その変化を記録することにした。

## 3) 分析視点とその方法

ソーシャルワーク実践に関する事例研究において、ジェノグラム（genogram）が用いられることは多い。ジェノグラムは、1950年代に家族療法の分野で、家族内の情緒的な関係性を読

み解く道具としてボーエン（Bowen, M.）によって開発されたものである。その後、ソーシャルワーカーのマックゴールドリック（McGoldrick, M）らによってその記載方法や解釈が標準化された<sup>5)</sup>といわれる。しかし、ジェノグラムはもともとボーエンをはじめとする精神分析学派の人たちの影響を強く受けていたこともあり、現在（今）の家族の状態に関して過去の出来事や要因などの歴史的な変遷に分析視点が置かれる。ところがファミリー・マップは、現在の家族のあり様そのものに焦点が当てられ、家族内のコミュニケーション（相互作用）やまとも、親密性などの家族成員間の関係性に分析的な関心が置かれる<sup>6)7)</sup>。そのため、今の家族が抱える問題の形成とそのプロセスを導き出す方法としてジェノグラムよりも有効であると考ええる。そこで今回、試論的ではあるが、ジェノグラムの記載方法を基本としつつ、新たに家族成員間の情緒的な結びつきや相互作用を記号として示すファミリー・マップの技法を用いることにした。なお、ファミリー・マップで用いられる記号の種類とそれらの意味については、おおよその共通項はあるものの、確立した記載方法はないため、本研究では表 1 に示すような記号を使用して表現することにした。

## 4) 倫理的配慮

本研究では、著者がこれまでに経験した内容をもとに、事例の本筋を歪めない範囲で新しく作成した架空の事例を使用する。そのため、事例で登場する人物や家族構成はまったくの架空である。但し、架空の事例ではあるが事例において重要な事実関係については変えていない。

なお、本事例の作成にあたっては、著者が SC として従事する当該教育機関の管理職ならびに実際の支援に携わった教職員と慎重な議論を重ね、事例が特定されることがないように細心の注意を払った。それと同時に、架空の事例ではあるが子どもの置かれた状況の現実感を損なわないようにも配慮した。

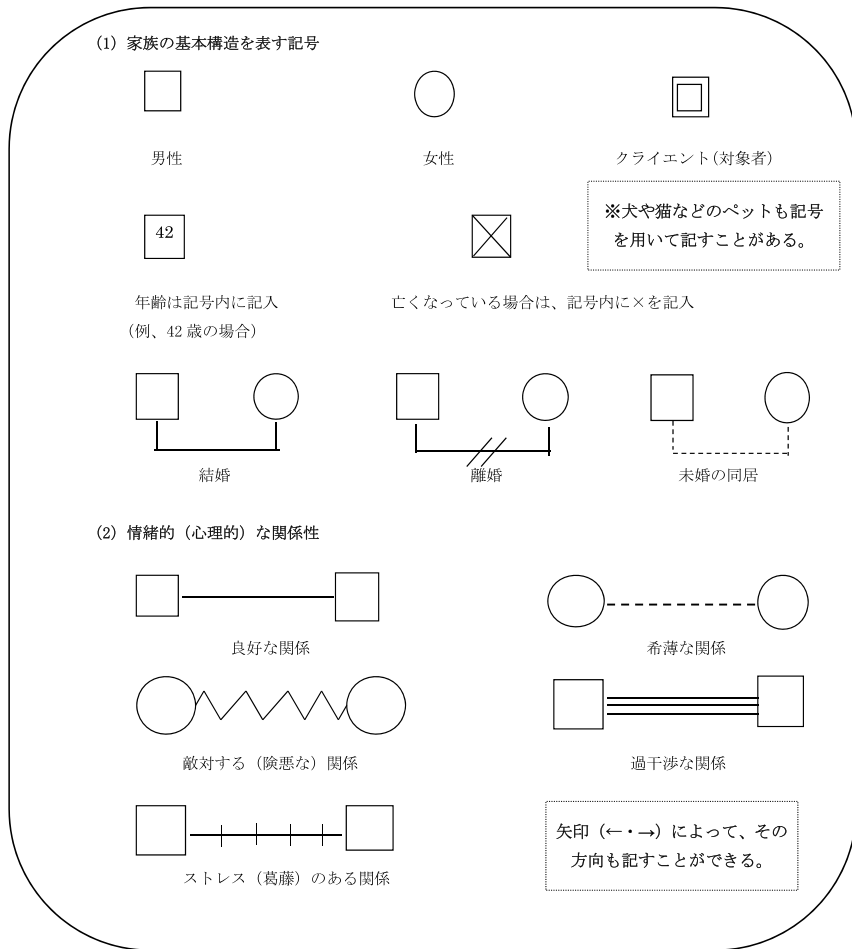


表1 ファミリー・マップの記号とその意味(記載例)

### 3. 事例の提示

本研究で提示する事例は、暴力とネグレクトを背景に長期欠席(不登校)状態を呈した中学生(以下「A児」とする)の一事例である。

以下に、A児の家族構成、A児の学校および家庭での様子、事例の経過(主にSCおよび関係機関のかかわりとその支援内容)について簡潔に述べる。

#### 1) 家族構成

現在(X年)、A児は中学3年生である。A児は、母親(実母)、姉、兄、妹、そして母親と同棲中の男性(以下「B氏」とする)の6人でアパートに暮らしている。

A児の両親(実父母)は、A児が小学校3年生の時に離婚しているが、A児と父親(実父)は今も時折、連絡を取り合っている。そのことに対して、母親(実母)もB氏もあまり心良くは思っていない。後述するが、A児は、X-1年ほど前の中学2年の1学期頃から、B氏による厳しいしつけ(暴力)とネグレクトを繰り返すようになる。そしてその時期を同じくして、A児の学校での問題行動が顕在化していった。

A児の家庭は以前より生活保護を受給しており、母親は無職である。また母親と同棲中のB氏は、X-2年前からA児と同居している(A児は当時中学1年生であった)とのことであっ

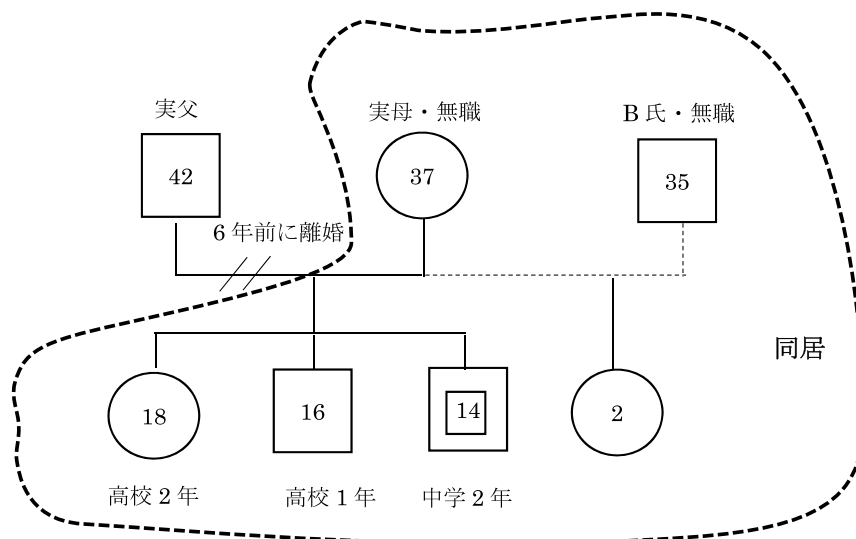


図1 A児の家族構成図（ジェノグラム）

た。B氏は、以前は仕事をしていたが、現在は求職活動中（無職）であった。なお、B氏は、A児が中学3年になった頃、県外にある工事現場で期間工として働くようになり、A児の家族とは別の世帯（単身赴任）となり、現在（X年）は単身赴任中である。

図1は、A児の問題行動や不登校が目立つようになった中学2年の1学期頃の家族構成図（ジェノグラム）である。

## 2) A児の学校および家庭での様子

A児の学校での様子は、中学2年の1学期から遅刻が目立つようになり、また学校に登校しても、授業を抜け出しては保健室で過ごすことがしばしば見られるようになった。その後、中学2年の2学期頃には、授業を抜け出して喫煙をしたり、無断で早退するなどの問題行動が頻繁に見られるようになった。そのような行動は中学2年の3学期まで続いた。

A児の級友との関係は比較的良好であったが、A児が中学2年の2学期頃、不機嫌やイライラなどの精神的に不安定な状態になることが多くなり、些細なことで口論や喧嘩になることもあった。また同じ時期に、A児の学習意欲も低下し、

それに伴って学力（テストの点数）も低くなっていった。なお、A児は美術や音楽といった芸術科目は得意で、以前からSCに対して「将来はイラストを描く仕事がしたい」と語っていた。

一方、A児の家庭での様子については、学校と打って変わって大人しく、母親と一緒に家事の手伝いをするとても良い子であるとのことであった（母親談）。しかし、後のSCによるA児との面接の中で、A児のこの頃の家庭での様子は、虐待的環境による感情の抑圧が起こっていたことが推測された。

A児と他の兄弟姉妹との関係は良好であった。ところが2歳（A児が中学2年生当時）の妹に対しては、A児は複雑な感情を抱いており、八つ当たりすることも多かった。またA児は、同居するB氏に対しあまり好意を抱いておらず、またB氏も同様にA児に対してとても無関心であった。しかし後に、A児の喫煙などの問題行動が起こった際には、B氏は、A児に対して食事を与えないことや身体に痣ができるくらいの暴力で叱ることもしばしば見られたとのことであった（母親談）。

### 3) 事例の経過（主に SC および関係機関のかかわりとその支援内容について）

A児と SC との最初の出会（接点）は、担任からの紹介で、A児の遅刻や欠席が少しずつ目立ち始めた時期であった。その後A児と SC は、約2週間に1回のペースで面接（家庭訪問含む）を行っていった。面接では、A児はよく家族の話題をしていた。母親とB氏との関係についての不満やB氏との関係の悪さについて語られることがよくあった。また一方で、実父との思い出話や実父は尊敬する気持ちなどがA児の語りの中から聞かれた。

また、A児の欠席が続いた中学2年の2学期頃には、中学校内の委員会ではA児に対する支援内容を検討するために定期的なケース会議が行われた。その会議では、A児の長期欠席（不登校）状態を改善するための支援計画（短期目標）の設定と、虐待的養育環境からA児の安全を守るための関係者会議の必要性について協議された。その協議の結果を踏まえ、その後、児童相談所や自治体（児童福祉担当課）等による行政・相談機関の支援も実施され、以降は地域の関係

機関が連携するかたちでA児への支援が展開されていった。なお、その支援はA児の問題行動や不登校が大きく改善された中学3年の1学期頃まで継続された。

### 4. 結果と考察

#### 1) A児の長期欠席および問題行動の継時的変化について～単一事例研究法（A-Bデザイン）による検討～

本事例におけるA児の欠席および問題行動の状況について、時間を軸にその変遷を図式化したものが図2である。

A児は、中学2年の1学期を迎えた頃から遅刻が目立つようになり、その後、急激に欠席日数が増加していった。この欠席日数の増加に比例して、喫煙や無断早退などの学校での問題行動も増大していった。

この図2のように、欠席日数と問題行動の頻度はそれぞれが呼応するように増減を示している。これはA児から発せられる SOS としての何らかのサインとして読み取ることができる。

その後、このようなA児の状況に対して、学

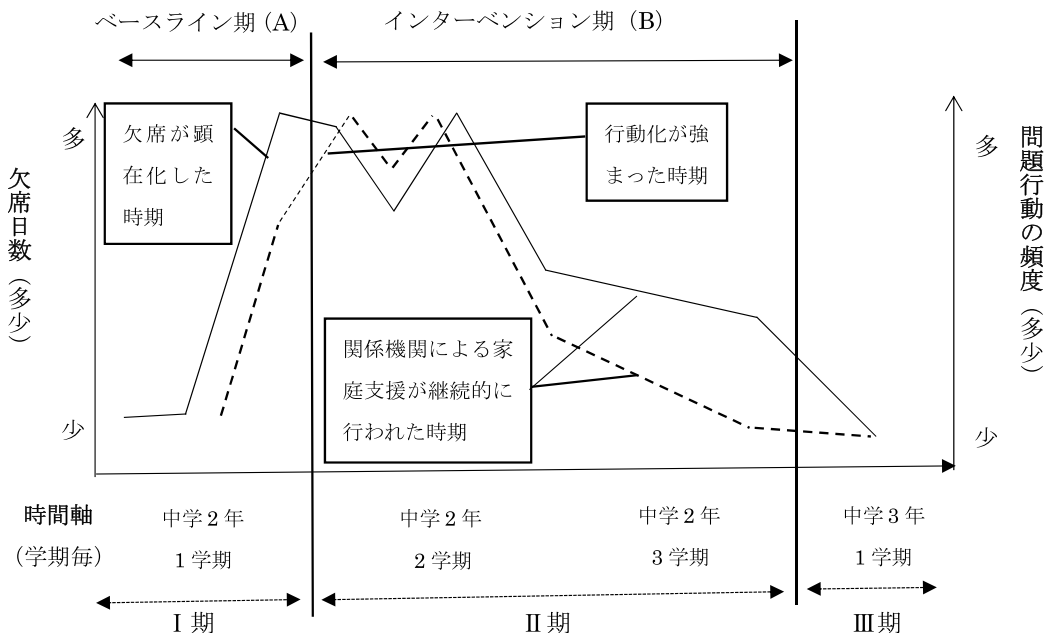


図2 A児の長期欠席および問題行動の継時的変化のイメージ図



この状況からもわかるように、A児は家族に対して強い葛藤を抱いており、その感情のはけ口として、その後の学校での問題行動化につながっていることが推測された。

つぎのⅡ期の段階でのA児を取り巻く家庭内の情緒的な関係は図4の通りである。

この頃、A児とB氏の関係はさらに悪化し、お互いにストレス（葛藤）を感じる関係となっていた。A児はB氏との関係を母親（実母）に相談することもあったが、いつも「それはあなたが我慢しなきゃ」や「あなたはもっとB氏のことを好きにならなさい」などと言われることが多くあった。そしてA児はそのことを実父に相談することもあった。A児は、このやり場のない気持ちをしばしば2歳の妹に八つ当たりとして向けることもあった。他の兄弟姉妹（高校2年、1年生）はA児に対して同情的な感情を抱いていたが、B氏の暴力が怖く、何もできないでいた。先述の図2にもあるように、この頃からA児の喫煙や無断早退などの問題行動が急激にみられるようになり、A児の家庭内ではストレス（葛藤）がますます増大していった。

この頃のファミリー・マップ（図4）のよう

に、A児とB氏の関係は陰悪となり、また母親（実母）や2歳の妹に対しても敵対的な心情を抱いていた。またA児は家族、特にB氏と母親（実母）に対して、強くて激しいネガティブな感情を持ち、それが常態化していることが窺える。その抑圧された感情やストレスフルな状況が、A児を問題行動に追い込んでいることが推測された。

そしてこの時期から、SCによるA児に対する面談も定期的に行われた。A児はSCに対してこの頃の家庭の雰囲気を「息のできない重々しい空気」と表現していた。また面談の中でA児は実父に対する気持ちを語ることも多かった。さらに母親とB氏との関係や、B氏とあまり上手くいっていないことも語られていた。そしてA児との対話の中で「どうせ俺が悪いんだろ」や「誰も俺のことをわかってくれない」などの、自己否定的な言葉が聞かれることも多々あった。このようなA児の言動は、虐待的環境に置かれている環境的要因からみられる心性（反応）であると理解できる。このような場合、自尊心や自己肯定感が低下している子どもに対し、受容的な態度なかかわりを持つことが必要であると

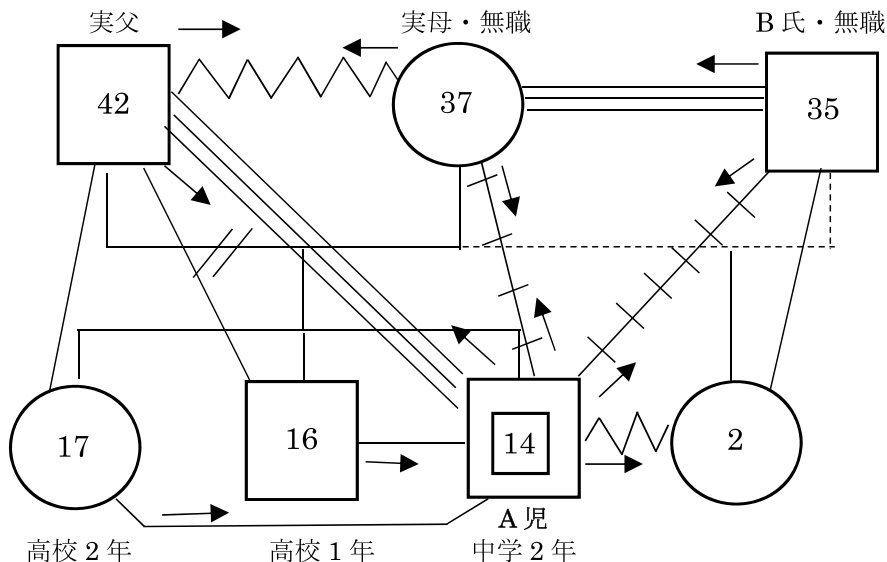


図4 Ⅱ期におけるA児の家庭内における情緒的關係（A児が中学1年の2学期頃）

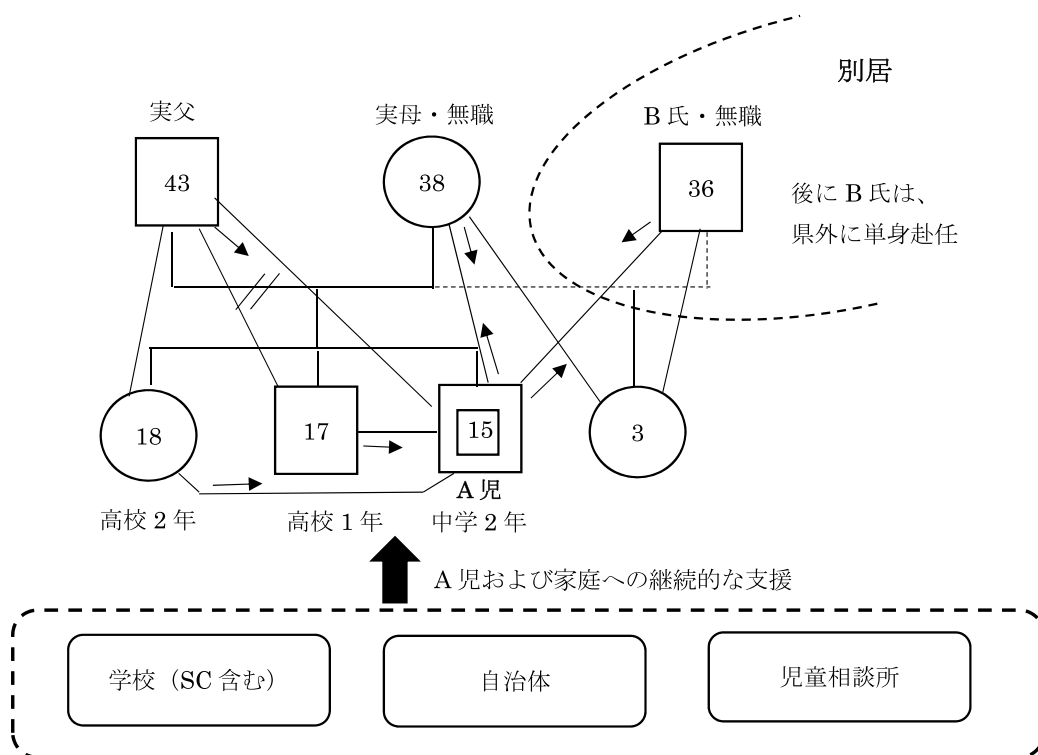


図5 Ⅲ期におけるA児の家庭内における情緒的關係（A児が中学3年の1学期頃）

いえる。また支援者は、傷ついた子どもの心を癒す存在として「話すことによる癒し」<sup>8)</sup>を促すように支援を行っていくことが求められよう。

その後、学校内でケース会議が開かれ、その中でA児の気持ちが共有され、A児に対する支援について学校内外の関係者を含めてなされた。さらに、関係機関がそれぞれ役割を分担しながらチームとなって、A児とその家庭に対する継続的なかわりが行われた。その結果、Ⅱ期の後半には、A児の問題行動は激減し、学校に登校する機会も増えていった。

このような継続した家庭への介入によって、家族成員間の情緒的関係、特に関係性の「方向」に変化が見られた。子どもを取り巻く大人がA児の気持ちを理解し、温かい目で見守るようになり、またB氏も母親（実母）に対する過干渉的な態度が低減していった。この頃のA児を取り巻く家庭内の情緒的関係は図5の通りである。

そして、A児が中学3年生になった頃には、A児の問題行動は消失し、家庭内の情緒的な関係もストレスfulな状態から良好な状態へと変化した。その後、B氏が県外の工事現場で期間工として単身赴任するようになり、家庭成員の大きな変化が生じたが、A児の家族内での情緒的な関係は良好で、安定した家庭生活を送るようになった。

## 5. ま と め

本研究から、家庭内でのストレス（葛藤）や抑圧された感情が、問題行動として行動化している場合、子ども本人と家庭全体の両方を支援対象として捉え、支援者が協働し、共感的に日常的な関わりを積み重ねていくことにより、子どもの精神的な健康の回復が図られることが確認された。特にファミリー・マップの検討から、家族内の情緒的なつながりの変化が子どもの様々な行動に影響を与えていることが示された。ま

たさらに、虐待的環境で生きる子どもに具体的な支援を行う際、自尊心の低さや自己肯定感の低下から表出されるネガティブな言動への心理的なケアとして、日常的に個別面談を行ったり、子どもの葛藤や不満などの生の声に耳を傾け、その思いに共感することが重要であることが再確認された。

最後に、本研究は「情緒的関係」の検証という経験則に基づく、アナログ的なものである。エビデンスに基づく研究方法とは異なり、最近の研究 방법에そぐわないところがあることは否めない。しかしながら、この情緒的な関係を丁寧に見つめ、関係性をもつ力に光を当てることの重要性について蛇足ながら改めて強調しておきたい。

## 付 記

本研究の内容は、日本子ども虐待防止学会第21回学術集会での報告（口頭発表）に大幅な加筆・修正を加えたものである。

## 注

注1）厚生労働省より2015（平成27）年10月に発表された最新のデータは、厚生労働省のホームページに掲載された「子ども虐待による死亡事例等の検証結果（第11次報告の概要）及び児童相談所での児童虐待相談対応件数等」（2015年11月1日閲覧）に記されている。

[http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/img-X07223508\\_2.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/img-X07223508_2.pdf)

注2）文部科学省より2014（平成26）年10月に発表された最新データを使用した。文部科学省のホームページより「平成25年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」をダウンロードして参照した（2015年11月1日閲覧）。

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/)

26/10/\_icsFiles/afieldfile/2014/10/16/1351936\_01\_1.pdf

注3）文部科学省より2004（平成16）年4月15日付で発表された「現在長期間学校を休んでいる児童生徒の状況等に関する調査結果とその対応について（通知）」の内容を参照した（2015年10月16日閲覧）。

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/04121502/1301580.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/1301580.htm)

## 引用・参考文献

- 1）保坂亨（2000）『学校を欠席する子どもたち—長期欠席・不登校から学校教育を考える』東京大学出版会。
- 2）保坂亨編著（2007）『日本の子ども虐待—戦後日本の「子どもの危機的状況」に関する心理社会的分析』福村出版。
- 3）羽間京子，保坂亨，小木曾宏（2011）「接触困難な長期欠席児童（および保護者）に学校教職員はどのようなアプローチが可能か—法的規定をめぐる整理—」『千葉大学教育学部研究紀要』第59巻，13-19頁。
- 4）安倍計彦（2012）「子どもネグレクトにおける重症度に関する研究」『西南学院大学人間科学論集』第8巻第1号，87-107頁。
- 5）日本社会福祉実践理論学会監修 米本秀仁，高橋信行，志村健一編著（2004）「第Ⅱ部 事例研究の手法 第5章 ジュノグラム」『事例研究・教育法—理論と実践力の向上を目指して—』43-55頁。
- 6）永田忠夫（1992）「円環モデルに基づくファミリー・マップの検討—女子短大生のいる家族の全成員調査の結果—」『愛知淑徳短期大学研究紀要』第31号 175-193頁。
- 7）永田忠夫（1995）「家族のコミュニケーション環境要因とファミリー・マップの関係について」『愛知淑徳短期大学研究紀要』第34号 159-181頁。
- 8）西澤哲（1997）『子どものトラウマ』講談社現代新書 159-174頁。